

## 観音経の構造に関する考察

講師 吉澤 秀知

観音経を解説する上で重要なことは、經典に施された鳩摩羅什による意図的な操作を見つけることである。それは、鳩摩羅什の思想の理解につながるものであろう。

観音経の前半では、「觀其音声」という語が無尽意菩薩の質問に対する答えであることから分かるように、「音」を重視していることが読み取れる。七難において重要な語は「聞・持・称」の三語である。観音菩薩の威神力によって七難から逃れることができる具体例を挙げながら、同時に「聞・持・称」という語を使って、仏教あるいは観音菩薩に対する信仰の初期段階を示そうとしている。

七難の総説として、「若有無量百千万億衆生受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心称名。觀世音菩薩即時觀其音声皆得解脱」の一文がある。しかし、梵文原典の対応部分では、「善男子よ、ここに数百・千・コータイ・ナユタに及ぶ衆生がいて、諸々の苦しみに耐えている、その彼ら「衆生」がもし觀世音菩薩摩訶薩の名前を聞くならば、彼ら全て「の衆生」が、その苦しみの集まり（塊）から解放されるであろう」とあり、ここに「一心称名」は無く、名前を「聞く（耳にする）」だけで救われると説くのみである。仏教を知らない人が、ひとたび「觀世音菩薩」という言葉を聞くだけで、観音菩薩はその人を救ってくれるという、

偉大な力があると考えているのである。また、漢訳に「聞是觀世音菩薩」とあることによって、この「觀世音菩薩」という語が菩薩の名前ではあるが、同時に音であるということをも示そうとする。梵文では「もし觀世音菩薩の名前を聞けば」とあり、明らかに名前 (nāmadheya-) という語を使っているが、漢訳では使われない。このように操作することによって、鳩摩羅什は意図的に、「觀世音菩薩」という言葉が何を指しているのか理解できていない人々であっても救済対象となるということを示しているのである。

鳩摩羅什は、この文章に「一心称名」を付け加える。観音菩薩の威神力を認めつつも、言葉だけで救われるというのは、仏教伝道にとって不都合であり、人々の信仰を篤くするために、ひたすらに名前を称えるという行為が必要であることを示すために、「一心称名」という語を用いたのである。さらに「觀其音声」を付け加えることによって、人々の必死な心を観音菩薩が感じ取り、威神力によって救済されると変え、信仰の重要性を示すことになり、ここに鳩摩羅什の意図が隠されているのであろう。

「聞」の働きのよって「持」が生じる。本来は「觀世音菩薩」という言葉を聞くだけで人々は救われるが、これは信仰の度合いが極めて薄く、聞いて、それを「觀世音菩薩」という名前だと認識し、「心にとどめて記憶する」ことが、信仰にとって重要であるとしているのである。「持」

はこの第一難に使われる一度だけである。これ以降は「受持」に変わる。これは総説と第一難において「聞↓持」という形を作り、そして、「称」、つまり名前を声に出すという行為によって信仰がさらに篤くなるとしたのである。

「聞↓持」を受け、どこかで聞いた名前を忘れずに心の中に思い浮かべ「受持」という形になるとするならば、この「持」と「受持」には大きな違いがある。第一難においては、「観世音／avalokiteśvara」という言葉を聞いて覚えていただけで、観音菩薩のことを知らず、名前とも認識していない可能性がある。しかし、「受持」が観音菩薩のことを認識し、受け入れ、信仰するということを意味内容として持つならば、この「持」と「受持」には大きな違いが現れる。それ故に、鳩摩羅什は、第一難においては「観世音」という言葉をどこかで耳にしたことがあるということを示し、それ以降は観音菩薩のことを信仰しているということを示すために「受持」という語を使用しているのではないだろうか。